本当にやる気をひき出すには

「言わぬは言うにまさる」ということで、雄弁の銀に対して「沈黙は金」の価値のあることを前項でお話しました。しかし、言葉は、適切に使われるならば、これほど価値の高いものはありません。

実は、言葉は偉大な力をもつものだからこそ、不用意に使うと害もまた甚だしいものがあるわけです。それで、不用意な言葉を戒めるために「言わぬは言うにまさる」という諺が出来たわけです。

また、どんなに効く薬でも、常用していますとその効果が薄れるように、言葉も余り使いすぎますと、その効果が薄れます。だから「沈黙は金なり」という諺を作ってそれを戒めているわけです。

だから、ほんとは「言わぬは言うにまさる」であってはならないのです。沈黙が金であるならば、ダイヤモンドのような輝きをもった言葉の使い方をしたいものです。

例えば、子供が茶碗を運ぶ手伝いをしていて過って茶碗を落し、欠いたとしましょう。「まあ、お前っていつもそそっかしいからそういうことになるんです。もっと落着いて注意してやりなさい」と言って叱るタイプの母親があります。

こんな言い方をしてどんな効果を期待しているのでしょう。これこそ「言わぬ」方がずっとよろしい。でもこの掲合「沈黙は金なり」では決してありません。子供は茶碗を欠いたことで悪いことをしたと思い、困り切っているのです。

「だれにだって失政することはあるものよ。心配しないでもいいの」とまず慰めてやるべきです。そう言って慰めてやらなければ、進んでお手伝いする気持がなくなるか、弱まるか、どちらかです。

「お母さんも子供の時、お手伝いをしていて茶碗を割ってしまったことがあるの。でも、どうして茶碗を落したのかな。茶碗の持ち方がいけなかったのかな。指の掛け方が足りなかったのかたって考えて、それでだんだん失政が少なくなり、上手にお手伝い出来るようになったのよ。失敗しても、その失敗を生かすことが肝腎なのね。」

「それから、欠けた茶碗を片づける時、欠け目が鋭いから指を切りやすいので、そっとつまむようにするのね」と言って教えてやることも必要です。こういう時こそ親の暖かい愛情で子供を包んでやることが必要なのです。

試験の成績へ二つの対応が

次に、子供が学校へ通うようになり、成績簿を家に持ち帰った時、それについて言う親の二通りの言い方を考えてみましょう。例えば、評点が 80 点だったと仮定します。

「80 点か。これ位の点で満足していてはだめよ。もっと順張って、今度は百点を取って来なさい」「お母さんはね、よく百点を取ったものよ」というのがその一つです。

「まあ 80 点。よくやったわね。えらいわね。でもお母さんはね、お前のことだからきっとこれ位はやる、と思っていたわよ」という言い方がその二です。どちらの言い方が子供にとってやる気を起こさせるでしょう。勿論後者です。前者の言い方をされたらやる気が起きるどころか、意気消沈です。

また、前者のような言い方をする母親は、百点を取って来たら満足するかと言いますと、決してそうではありません。「それでお隣りの〇〇ちゃんは何点たった？」とか、「百点取った子何人くらいいた？」とか言って尋ねます。

我が子だけが百点だったということですと満足しますが、もしも「お隣りの〇〇ちゃんも百点だった」「百点を取った子が大勢いた」と聞きますと、途端に不満な顔になります。

もしも反対に、お隣りの〇〇ちゃんが百点て、わが子が 80 点だったらどう言うでしょう。「お隣りの〇〇ちゃんはえらいわね。お前も〇〇ちゃんを見習って、同じように百点を取らないと恥ずかしいでしょ」と言います。

子供にとって確かにそれは恥かしいことです。それは母親に言われるまでもないことです。でもお隣りの〇〇ちゃんを見習えと言われても簡単に出来ることではありません。だから、よその子を引き合いにして見習えと言われるほどいやなことはない、とどの子も言います。

親は子供を奮起させようと思って言うのでしょうが、こういう言い方は奮起させるどころか、子供にやる気をなくさせるものです。それは子供の立場に立って考えたものではありません。子供に親の愛情を感じさせる言葉でなければ効き目はないのです。

「お隣りの〇〇ちゃんに見習え」と言う親に限って、子供が「お隣りの〇〇ちゃんが持っている玩具、僕にも買って」と言えば、「隣は隣、うちはうち、何でも人の真似をするもんじゃありません」と言います。

こんな理窟ばかり言っていますと、子供は「大人の言うことは勝手だ。人に見習えと言ったり、真似するなと言う」と考えて大人に不信の念を懐くようになります。こうなったらもうおしまいです。